

〈研究ノート〉

マルクス没後百年に寄せて

——おくればせの革新へ——

望 月 清 司

一

『別冊経済セミナー』の「ケインズ生誕一〇〇年」特集に寄せて伊賀隆が興味ふかいことを書いている。経済理論にもファッション性があつて、そのワン・サイクルは約五〇年（『国富論』↓『経済学および課税の原理』↓『資本論』↓『雇用・利子および貨幣の一般理論』）であるが、これは一つの経済システムの耐用年数がほぼ五〇年であることの反映である。伊賀が強調したい点はもう一つあつて、それはこうした理論が定着するのにはこれも経験的にみて平均四〇年のタイム・ラグを要するという点である。たとえばスミスの死から航海条令廃止まで五九年、マルクスの死からロシア革命まで三四年、ケインズの死からニクソン大統領の金・ドル交換停止まで二五年⁽¹⁾。

思想や理論にも生物学的な生涯があるとしよう。第一段階が生育期でたとえばインターナショナルとかケインズ革命という形で人びとを次第にとらえてゆく時期、第二段階がいわゆる「制度化」の進行＝成熟の時期、第三

段階が制度化の自己目的化というか老成と防御のはての衰弱期とする。だが旧思想は衰退期に入ってもなかなか頑強で追いついてくる新思想に覇権を渡すまいと奔命する。伊賀の数字からすれば、新しい支配的な理論が完全なブライマシーを誇れるのはわずか一〇年の期間でしかないことになるう。

マルクスについてはどうであらうか。彼の思想や理論の「制度化」が一九一七年に始まり、国家装置的バックアップによってそこから新しい官許的「マルクス主義」のライフ・サイクルがスタートしたとすれば、その間にローザ、ルカーチ、コルシュらをはさんで一九六〇年代に衰退期を迎えることになる。思想の運命に関するこの計算は史実に符合していた。「マルクス主義」の批判的革新、いわゆるマルクス・ルネッサンスはまさに一九六〇年代半ばから開花するからである。

「マルクス離れ」ということが言いはやされて久しい。だが「離れ」られているのは別にマルクスばかりではない。ケインズもわが大蔵省から追放されたし、ハーバード大学ではサミュエルソン『経済学』でさえ既にスタンダード・テキストの玉座から転落したといわれる（朝日新聞昭和五四年二月二六日）。カリフォルニア大学ではハイルブローナーとサローの共著『経済問題』（*Economics Explained*）を代りのテキストに使うことにした模様であるが、そのハイルブローナーは今や、新従属理論家サミール・アミンや広い意味でアミンと同じ問題意識に立つウォラステインに共感を示し、「蓄積の社会構造」としての資本主義システムの限界のゆえに「かつては皮肉半分でしたが、今はまったく真剣に社会主義は資本主義の最終段階だと考えています」（一九八二年二月）と告白しているのである。⁽³⁾

いまひとまわり大きな視野に立てば、見はなされつつあるのは経済学という学問体系そのものなのではないか。誠実な多くの警告にもかかわらず進行する自然破壊への責任は「蓄積の社会構造」それ自体に劣らず、生産

力信仰という点でバラダイムを分有したマルクス主義と近代諸科学（近代経済学をふくむ）とが負うべきものとされたのであろう。書店での経済学のスペースは直接にはビジネス・ブックの類に、間接には記号論や人類学や健康書やマンガによって侵掠され、極端に小さくなっている。〈知〉の体系における哲学の復権が語られているのも、これと表裏する潮流を示すものであろう。

「マルクス離れ」を経済学ひいては社会科学一般離れによって稀釈し免責しようとしているのだと思わないで欲しい。見はなされている「マルクス」を直視し、それと訣別するための、新たな視座を獲得するためにこう言うのである。この意味で、マルクス・ルネッサンスの約二〇年は、支配的思想としての「マルクス主義」の自己防御の二〇年とサイクルを一にしている。拒みかつ再生するという思想史に共通するパターンをマルクス思想もいま苦しみつつ追体験しているというふうにも言えるのである。

ところで、前記ハイルブローナーの予言は、彼自身がその名に言及しているシュンペーターのそれを、観方によつては有名なウエーバーの予言を想起させる。おのれを駆り立ててやまないイノヴェーションの成功のはてにシュンペーターは資本主義の崩壊を見、ウエーバーは資本主義の動力である合理主義の終着点に精神なき専門人独裁としての官僚制を見た。ハイルブローナーのそれをふくめて彼らの予言は当たったであろうか、また当るであろうか。

さしあたりシュンペーターとウエーバーにかざれば、当たったとも言えるし当たらないとも言える。冒険的企業家にかわったサラリーマン経営者が政府権力の介入に諾々として従う今日の「大企業資本主義」は、シュンペーターからすれば既にして本来の「競争的」資本主義の衰亡のあかしにはかなるまい。⁽³⁾ウエーバーの予言は「一九八四年」の今日ますます無気味に実現しつつあるとも言える。だが現在の時点では二人の予言の実現を否定する個

別の反証のたぐいはいくらもあるのであって、要するに、予言それぞれの含蓄と展望とからわれわれ自身が何とかを学びとる姿勢を欠いたまま、当たった外れたとあげつらうのは愚かしいまでに無意味である。

もうひとつ付け加えておくなら、今日ひとに記憶されるほどの予言であれば、その実現によって再起不能のダメージを受けると考える当事者たちは、いわばおのれの存亡を賭けた合理的期待形成行動に打って出るはずで、そこに予言者の思いもかけぬ軌道が出現することになる。シュンペーターは知識人の保守化を、ケインズは圧力団体の既得権死守を、そしてマルクスは労働日をめぐる資本家階級の譲歩をそれぞれ予見できなかった。しかしこれらは三人の社会的ヴィジョンの名譽をいささかも傷つけるものではない。彼らそれぞれの予言は、「この新しい理論」のちに撤回することになる〈新古典派総合〉のこと——引用者——は、いまから二〇年後のソ連市民にとって、一九一七年以来共産系大学の教科書の特徴をなしていたヴィクトリア時代資本主義の批判混合物よりも、あるいは関連性のいつそう深いものになる」だろうという一九六六年のサミュエルソンの予言（『経済学』第六版「日本語版への序文」）などにくらべれば、はるかに強烈な実践的インパクトを社会と歴史に与えた。ケインズは大量失業への有効な処方箋を書いたが、彼をしてかく強いたのは、名目賃金を下方に硬直させて動じない西ヨーロッパ労働者運動の歴史であった。春秋の筆法をもってすればマルクスも完全雇用に重大な一役を買っているのである。

ふたたび伊賀隆の秀逸な逆説をかりれば、「正しい予言は当たらないのであり、また当たらないからこそ、それは正しい預言だということになる」⁽⁴⁾。むしろこの逆説は、あれから二〇年後——まだあと二年の余裕はあるが——のソ連市民が一向に『経済学』を迎えそうにないからといってサミュエルソンに榮譽を与えるものではない。当たったか当らなかったかは、その予言がひとを正負さまたまの合理的期待形成に走らせたかどうかにかかるとすれ

ば、サミュエルソンのそれは誰をも動かさなかったからである。

没後百年を卜して書かれた昨年の多くの論文を通観してみると、無条件護教派または保守派は別として、また卒業あるいは・そして葬送派はある意味で当然として、再生派とされる論者もその多くが「マルクスの予言外れ」を枕に振った上で論旨を展開しているのに気付く。そのこと自体はいわば強調の文法であって異を立てるつもりはない。気になるのは、なるほど中期のマルクスは西欧中心主義だったが晩年にはそれを克服して多系発展説に到達したとか（代表的には小谷汪之）、あるいは、マルクスの世界革命論は先進国では妥当しなかったが第三世界では実現したとか（代表的には菅孝行⁽⁵⁾）、時と場所をずらせることでマルクスを支持するスタイルである。結論の可否は措くとしても、このスタイルによる主張が結局は予言の当り外れを基準としてマルクス思想の成長や適用範囲を論じていることに違いはない。

この種の試みが思想家論としてはたしかに重要である。なんといっても対象となる思想を動態と全体において正確に把握しておくことがいかなる評価であれ大前提となるのであって、論証不在のままマルクスは致命的に徹底した集権主義者だったとかケインズは実はロシア革命に期待していたとか断定してみても話は始まらない。しかし、だからといって、時と場所を変えれば予言は適中しているといった論法によってマルクスを救えるか。恐らく救えない。みごとに当った（と保証された）予言はひとを再び権威へとよりからせるからである。しかし前記の論文をもふくめて知的により刺激的なのは、むしろ外れた予言の分析のほうである。なぜ外れたのか、マルクスの論理や構想になにか原則的な欠陥があるのではないかという疑いからこそ、思想が内包する真実の展開が始まる。その果てにマルクスが否定されたとしてもそれはマルクスの社会・歴史認識の名誉でこそあれ汚辱ではありえない。

没後一〇〇年に当る昨一九八三年、マルクスとマルクス主義の功罪を論ずる多くの論文が商業誌や学術誌の紙面を飾った。すでにその動向を鳥瞰した好文章もいくつかあり（たとえば『週刊読書人』八三年四月二五日付、高橋洋児のそれ）、またヨーロッパ各地における没後一〇〇年記念集会の模様についても山中隆次の適切なりポートがある（『社会思想史研究』第七号『海外研究展望』欄）。私も、「マルクスは西欧中心主義者であったか」という副題を付した一文において、諸論稿を整理しコメントしておいた。⁽⁶⁾

- (1) 伊賀 隆「ケインズ経済学の一九八三年」、『別冊経済セミナー・ケインズ生誕一〇〇年』（日本評論社）、一五ページ。
- (2) ロバート・L・ハイルブローナー「資本主義の未来」、『経済セミナー』一九八三年五月号、五六ページ。
- (3) 熊谷尚夫「資本主義のビジョン・考」、『別冊経済セミナー・シュンペーター再発見』六七ページ。塩野谷祐一「資本主義文明の衰退と社会主義」、同上七四ページ。
- (4) 伊賀隆「経済学者の常識と一般常識」、『経済セミナー』八三年五月号、一三ページ。
- (5) 小谷汪之「歴史観からみたマルクス」、『別冊経済セミナー・マルクス死後一〇〇年』所収。菅孝行「先進国に革命は起きていない」、同上所収。
- (6) 拙稿『資本の文明化作用』をめぐって、『経済学論集』（東大）、第四九卷3号（一九八三年一〇月）。

二

予言談議はこのくらいでとどめよう。もともと「予言」というような、実はどうしても定義できる用語で思想上の作品の価値を語ることが不毛であったのである。こんなに記憶されるに値する思想や理論は、こんなにちを

そこに包みこむ、当時にとつての近遠いずれかの未来に向けてのヴィジョンをふくんでいたからこそ現在なお記憶されている。だとすれば、当のヴィジョンの価値はそれが直接に何百年、何十年後の今日を言いあてているかどうかにはなく、そのヴィジョンによって刺激され新たな状況への分析用具をつぎつぎと作りだす後継者をどれほど輩出しているかに依存しよう。その展開はかならずしも単線的ではない。忠実な継承の流れの道途にそれは時として反逆の形をとった別個の流れを形成する。キリスト教史におけるカトリックとプロテスタントの、深刻な対抗をふくむ複線的発展の現象は、原始キリスト教が内包した矛盾よりはむしろ、それが提示した原ヴィジョンの生命力をこそ物語る。そしてルターやカルヴァンにはじまる周知のプロテスタント運動の歴史は、思想の後代における活性化のためのバネが、原ヴィジョンへの当代的な回顧にあつたことを示してまったく遺憾がない。そのような回顧に繰りかえし堪え、求めに應える思想や理論があれば、それこそ後代に、その「予言」の当否が熱く論じられることになる。言いかえれば、こんにちその「予言外れ」を大声で難詰されている思想や理論ほど、現在なんらかの場面で活性化の声に応えつつある思想や理論だということができよう。いまゲゼル少佐を顕彰してその生後年を記念しようとしたり、あるいは反対に論難する者が見あたらないのは、少佐が掲げたかも知れない予言が適中したり、あるいはその理論が誤っていたからではないのである。

没後百年のマルクスをめぐる、昨一九八三年のわが国でかわされた論評のかんりの部分が、この点を誤っていたのは残念といえは残念、当然といえは当然であつた。

当然のほうは事さらに批評する必要は認めない。百年前の状況に制約されざるをえなかった人物の、せいぜいが数十年先の未来予測がはずれたことを鬼の首でもとつたように言いたてることの無意味さは、恐らく当の本人たちが知悉しているであろうからである。問題は、マルクスのなかになお現代を解く鍵を見出そうと努力する側

に、それが主観的には善き意図に出ていることが十分に読みとれる筆で、「千八百何年までのマルクスはあの点で誤った予測を抱いていたが、千八百何年からあとのマルクスはこの点で正しい展望を抱くにいった」というパターンでマルクスを擁護するほうにある。

マルクスがその経済学、歴史理論、社会革命観において批判を浴びてきたのは、なにも没後百年を迎えてからのことではない。右のパターンは、そうした批判のうちの多少とも誠実な部分に多少とも誠実に論駁しようとしてきた人びとによく見られる擁護のパターンであった。古くはルカーチの階級意識論がそうであり、わが国の範囲では宇野弘蔵の経済学体系がひとつの典型をしめしている。

マルクスの巨大な思想的集積の全体をとりあつかう能力は私には欠けているし、また本年報編集者もそうした能力を私に期待しているはずもないから考察の範囲を彼の歴史理論にかぎることを許していただければ、一九六〇年以後のマルクス思想形成史研究の潮流のなかでは、山之内靖の秀作『マルクス・エンゲルスの世界史像』（未来社、一九六九年）が一八五八年あたりを境目とするマルクスの世界史把握の充実を力説していたし、また、私の理解するかぎりでのマルクス歴史理論に属するのであるが、青年マルクスの疎外の理論を『ドイツ・イデオロギー』——一八四五年一月から四六年八月まで——で自己批判、自己克服したというこれまた著名な広松渉による一連の物象化論がある。より新しくは、一八六七年以後のアイルランド認識における回心を契機としたマルクスの「低開発」発見を強調する毛利健三の『自由貿易帝国主義』（東京大学出版会、一九七八年）があった。

これらの著作がいずれも、ここ二〇年ほどのわが国マルクス学の深化に画期的な一役をになった労作群であることは衆目の一致するところである。だからと言うわけではないが、これらの労作は私が「残念に思う」文章には属さない。私が「残念」としないのは、これらの労作の筆者たちが単に、千八百何年以後のマルクスは覚醒し

て正しい立場に立ったと確認する以上に、その「正しい立場」にもたれてこれを墨守することなく、それぞれの研究分野にあつてマルクスを革新する営為をつみ重ねているからである。その成果への判断はいま留保するが、それはここでの論点ではない。問題は、ひとそれぞれの基準によりながら、「千八百何年か以降のマルクス」は従前の誤りを克服した、そして——当の論者の含意において——今なお正しい、とする論法なのである。

この種の論法が、いわゆる葬送派あるいは清算派からのマルクス批判を意識してのものであることは理解できる。いわゆる葬送派等が楽をしてかさにかかった攻撃をしかけてくるのは、マルクスの最もヴァルネラブルな部分——たとえば『共産党宣言』の国家論——まるごと徹頭徹尾というウルトラ護教論であろうから、あらかじめその部分の否認を共有しておくというタクティクスはそれなりに賢明であつて、後者と一線を画するという姿勢においても一定の説得力を期待できることになる。

だが、没後百年の論争場裡のタクティックに過ぎぬものとしてならともかく、この論法は暗示したように単なる論法以上のものである。抽象的な言い方を避けて具体的にいえばそれは、マルクスの歴史理論ひいては未来社会論——そこへの過渡をあつかう革命理論をもふくめて——にかかわる。

折よく没後百年にまに合った友人たちとの共同作業の序章において私は、現代のマルクス研究がその解決を要求されているものとして、「三つのカール・マルクス問題」を挙げておいた。内田義彦が「アダム・スミス問題」になぞらえたいわば「第一問題」は、戦後の『経済学・哲学草稿』研究の進展を背景にした、いわゆる初期マルクスと成熟期マルクスの関連いかなを問う問題である。次のいわば「カール・マルクス第二問題」とは、『資本論』までの彼と、社会主義的非ヨーロッパ的回路の可能性を示唆したかに見える、「ヴェーラ・ザスーリッチあての手紙（四つの草稿）」を書いた一八八一年以後の彼との異同を解く問題であり、そして最後の同「第三問題」と

は第三世界をも遺漏なく組みこんだ世界史像を要請する人びとから提起された、マルクス思想の西洋中心主義的偏心への批判とそれへの応答という構図⁽⁸⁾を謂う。

「第二問題」と「第三問題」は微妙に絡みあっている。

もしもマルクスが、西欧的な市民社会としてまた資本主義的工業生産力の全面的成熟のはてにのみ社会主義への革命的移行がある（「一つの社会構成体は、それが容れうるだけのすべての生産諸力が発展しきるまでは決して没落するものではない」という『経済学批判』序言）とした歴史Ⅱ社会認識を改めて、ロシアのようなケースでは農民共同体を核として社会主義の建設が可能であると考えるに至っていたとしたら——もちろんまだそうと決ったわけではない——、その時は、マルクスは西欧革命先導主義・西欧的生産力中心主義を脱却して非西欧世界に固有の「社会主義への移行」を構想していた、もっと広く言えば、非西欧世界を正當に視野におさめた世界史像を描くにいたったことになる。そしてそのことは当然、「カール・マルクス第三問題」に対してはマルクスを擁護する立場からの肯定的回答を保証することにもなるはずである。

このことを前置きとして、私のいまの関心をそそった没後百年記念の諸論稿についていおう。それらは、マルクスの「資本の文明化作用」という用語をひとしく非難し、そしてほぼひとしく「ヴェラ・ザスーリッチあての手紙（草稿）」のマルクスにおいて名譽を回復するという論法に立つものである。

このパターンの論文がいかにも目についたので、私はある短文で「このように合唱されると一言すねてみたくなる⁽⁹⁾」と書き、前掲拙稿で論旨をややくわしく開陳したが、むろんそれはすねた挙句の八ッ当りではなかった。

その拙稿に一部を紹介した批判的コメント——特に一八五〇年代の二期にわたるマルクスのインド社会論への

コメント——に用いられた言葉を再掲すれば——

「近代ヨーロッパ的（『自民族中心主義』）バイアス」、あるいは「一八・九世紀のヨーロッパの啓蒙主義思想、ロマン主義思想のイデオロギーに汚染された神話」（吾郷健二）

「ヨーロッパのブルジョアジー、政治権力、聖職者たちとあまり差のない」……「凶暴な」「進歩主義＝単線的・段階発展論、生産力主義」（菅孝行）

「正の価値としての西欧的近代社会（市民社会）理念を反転して」つくりあげられた「負の価値をもつ理念像」としての、「当時ヨーロッパで共有されていた常識的アジア像」（小谷汪之）

「自分の西洋中心主義の理論武装」のためだけに用いた「御都合主義」、「予断にもとづいた暴論」（沖浦和光）

「非ヨーロッパの諸地域を西ヨーロッパのレヴェルまでひきあげる」という「ぬきがたい思いこみ」、「西ヨーロッパ中心の発想」（山本 啓）

適当なところできちんとおこう。それぞれのニュアンスは異なるが、このように完膚なきまでに一八五〇年代のマルクスをくさすのも、前述のように晩年におけるドラマティックな啓示をきわだたせるためなのであって、たとえば山本は代表的にこう述べていた。

「晩年のロシア論をはじめとする共同体論の展開を契機にグローバルな多系的、複合的な発展説をみずからのものにしたとき、ようやくマルクスは西ヨーロッパ中心主義の限界から脱した。このときはじめて、唯物史観は完成をみたというべきなのである。」⁽¹⁰⁾

一連の主張の論旨はするどい。『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』紙への二期にわたってのいわゆる「インド通信」には、巧妙に引用すればマルクスを鼻もちならぬ進歩主義的近代主義者に仕立てあげるに十分な

辭句がふんだんに用いられている。ヨーロッパの近代科学によって踏みつけられ理論構造において完べきに無視された——いわゆる「開発経済学」も方法的個人主義の論理を「開発途上国」に機械的に適用しているにすぎない——第三世界を、言葉の正しい意味で相対化した歴史像をもとめる現代にあつては、むしろマルクスをもこの程度に「相対化」しておくほうがそのラディカルな革新をすすめやすいのかも知れない。

だが、そうした理論状況を考慮した上で次のことは言っておかねばならない。

第一。マルクスは「資本の文明化作用」というタームを『経済学批判要綱』では、あくまで他人の用語の逆説的利用として、しかも理論上の範疇として用いていた。引用者はこの語に自身の思い入れを過剰にこめていないか、しかもその思い入れをマルクス自身のそれと錯覚しながら。マルクスは「対外貿易のいわゆる文明化作用」といい、「資本の偉大な文明化作用」という語句をわざわざそこだけ英語で表記していたのである。⁽¹⁾

第二。インド社会分析の当否は別にしても、「ザスーリッチあての手紙」をもつてするところの、たとえば俗だが逆転サヨナラ・ホーマー的筆法は、ちょっと考えてみれば死去のわずか二年前（一八八一年）にいたつてようやくマルクスは真理に到達したということを主張していることになり、学的生活の大半を偏狭な世界観にしばられて過したと述べているに等しい。毛利健三をのぞく人びとにその論証の用意はあるか。

第三。学的生活といえはマルクスは、死去の寸前まで少くとも『資本論』の彫琢に心血を注いでいた。第一巻第三版の準備作業を開始したのはヴェラへの手紙を書いた翌一八八二年である。資本主義的生産様式が支配的な西ヨーロッパの市民的ゲゼルシャフトの構造分析にかけたこの論理愛と当面のロシア・ナロードニキ（土着社会主義・プラス・テロリズム）への支援表明とを思想的に接合するものはないか。

第四。右の三つの問題を解ききったうえでなお次の問題が残る。ヴェラへの「手紙」やほぼ同時期、同趣旨の

『共産党宣言』ロシア語序文（一八八二年、エンゲルスと共同署名）におけるマルクスの回心が真物だったとしよう。だがその場合も、西欧の生産力沸騰点革命と一定の共応関係でとらえられるロシアは、むしろ半アジア的な東ヨーロッパ社会と位置づけられている。しかるに（新）従属理論からみるかぎり、その西ヨーロッパ社会そのものが手紙ではまったく完結的な歴史的個体とされており、西欧的成熟にとって不可欠の栄養源だったラテン・アメリカや西インド諸島は影さえ落していない。西ヨーロッパにおける資本主義の生成したい既になんらかの意味での世界資本主義システムのな連関の所産である、とする発想——その発端に——から「重商主義的帝国主義」である——にたたない多元的發展説は、それしたい決定的な盲点を自覚できていない。サミール・アミンやA・G・フランクなどに言わせれば、そうした発想したい、たとえ西欧中心主義（オクシデントロ・エスノセントリズム）ではないとしても、アフリカの一角からこれを眺望するかぎり欧州中心主義（ユーロセントリズム）から一步もふみだしてはいないのである。断わっておくが、ここで「欧州中心主義」とみなされる考え方があるとすれば、それはただちにマルクス自身のロシア論のことではない。本原的蓄積論の体系的な解明なしに「ヴェラ・ザスーリツチへの手紙」の数十行でマルクスが見事に多元複合的の革命論者に生れ変ったと信じてやまない論者脳中のマルクスなのである。

ロシア共同体の認知行為をもってマルクスを浄化しようとする試みに対して右の三つの問題解決を求めた次第だが、この問いはいうまでもなく要求者自身にはねかえる。

まずはマルクスにおける理論ことに経済学理論と歴史的個別認識との峻別、しかるのち統合という、これからのマルクス研究に欠かせない方法を確立することである。護教派では両者ははじめから溶融している。宇野理論は峻別に急で結局後者を「イデオロギー的残滓」の堆積に積みこんでおわった。

次に、『資本論』の完成へとつとめる過程で整えられてくる「市民社会」像——もちろんその原石は西ヨーロッパ以外にはない——と、アイルランド認識やロシア革命論に姿を現わす非西欧社会変革の展望とが、マルクスのなかでいかに「同居」しえたかを見極めること。このことは同時に、現時点での世界資本主義システムのなかで日本にあつて第三世界諸社会の変動過程を分析する理論的——アルチュセールふうには「理論的实践」的——立脚点を確定することでもある。

問題の範囲をごく狭く限定して、没後百年にマルクスを救おうとした人びとに苦言を呈したつもりであるが、私の真意は無論、革新の営みをいたずらな教義問答のわき道に引きづりこもうとすることにはない。狭い意味での歴史理論の分野でわれわれは、いわゆる「史的唯物論」の基本的な諸カテゴリーの再検討はもとより、他の社会諸科学のゆたかな成果を吸収した、それらの根本的な組替えをふくむ社会Ⅱ歴史認識の方法をいま必要としているのである。

(7) 望月・内田弘・山田鋭夫・森田桐郎・花崎泉平『マルクス・著作と思想』(一九八三年、有斐閣新書)、序章「カー・マルクス問題」。

(8) この点について簡単には、拙稿「第三世界から提起された新世界史論争」、高橋彰ほか編『第三世界と経済学』(一九八二年、東京大学出版会)所収、を参照。

(9) 「思想の言葉」、『思想』一九八三年八月号。

(10) 山本啓「マルクスと世界認識のパラダイム」、『思想』一九八三年三月号、二〇九二—一〇一〇ページ。

(11) 「資本の文明化作用」の逆説は、同時に「低開発の開発」でもあるところの外向的、「脱臼的」——この語については後記——な「いちじるしい不均等を内包しながらも周辺部低開発地域で(進展しつつある)工業化」(森田桐郎「終章・世界経済の現段階」、森田・本山美彦編『世界経済論を学ぶ』有斐閣、三〇八ページ)であり、「NICsの工業化」(本山「貿易論序説」、一九八二年、有斐閣、第二章)、である。

三

以上は、没後百年の思想家を目がけて押しよせてきた外からの非難や内からの疑念のうちのほんの一部分に触れたにすぎない。高橋洋児の計算では昨八三年四月半ばの時点で一七〇編に達したというマルクス論の主題は、おそらく社会科学のすべての領域にかかわり、生起中の社会現象の一切に論及しているはずである。それらの一つ一つに言及することは物理的にさえ不可能である以上、ここでは「護教でもなく葬送でもなく」（菅孝行）マルクスを再生し止揚せんとする立場から三つの局面での手がかりを示唆するにとどめざるをえない。示唆というよりは再生し止揚のための協働的分業に一翼を担おうとする者の希望といったほうが適當であろう。

第一には、『資本論』が「（政治）経済学批判」と銘打たれているという周知の事実の根源的な究明。かつて私はこれをイギリス「ポリティカル・エコノミーの批判」である経済学と解釈した。文字面では誤っていないこの解釈はやはり経済学中心主義的に狭隘であった。マルクスの自然認識の解明（たとえば椎名重明「自然観から見たマルクス」、『別冊経済セミナー・マルクス死後一〇〇年』が進展するにつれて、またマルクス価値論背後の経済学では不可視の世界への哲学的な接近（たとえば今村仁司の『労働のオントロジー』（勁草書房）ほか一連の論稿）が次第に扉を開きつつあるように、『資本論』が経済学の形態をとりながら「経済学批判」としか名づけようのない「学」として存在することの意味がようやく明らかになりつつある。経済理論としては、それはそれで、たとえばネオ・リカード・アニズムあるいはスラッフィアン・マルクス主義との理論的対決を避けずに『資本論』理解を深める一方で、マルクスが常にロツシャールとミルの二大教科書の批判を心がけたように、もっとも

手近かにはたとえばサミュエルソン『経済学』が不断に祖上に上せられる新たな経済学体系が構想されなければならぬだろう。山崎カオルの絶妙な名称賦与をかりれば「マルクス経済学から『資本論』へ」⁽¹²⁾である。

この営みは第二に、「マルクス主義」の史観へのかなり根底的な再検討をともなわざるをえない。経済学主義とは別名基底体制還元主義だからであり、それへの自己批判はいわゆる土台Ⅱ上部構造論をも一度は解体しつつすほどの反省なしには完了しないからである。アルチュセール・バリバールの『資本論を読む』(合同出版、一九八三年再版)における、「生産様式のアーティキュレーション(articulation)」把握は、社会構成を相対的に自律的な歴史的時間で動く諸審級の有機的接合体ととらえることによって、旧「土台Ⅱ上部構造論」の動態化活性化の基礎をきづいた。こうして「読まれたマルクス」は、いま主としては西欧・アメリカで多様な形で独自の展開を遂げつつある。⁽¹³⁾アルチュセールのマルクス研究はしばしば「構造主義」の名でよばれるが、彼自身は、歴史貫通的な不可視の「構造」をマルクスの方法で読みとろうとしてはいても、その「構造」をいわゆる「構造主義」的に静態不変としてはいないのである。

第三に。この「アーティキュレーション」(「接合」または「節合」という方法的カテゴリーは、一方では資本主義成立過程の史論として(たとえばフィリップ・レイの『階級同盟』、さらには新従属理論に歴史分析の側から強力な修正補完用具としてはたらしながら(たとえばサミール・アミンの周辺資本主義の「脱臼」*déarticulation*理論)、こんにも帝国主義のレーニンの規定を大きく越える新たな世界資本主義的視座からの帝国主義理論を生みだす契機をなしている。A・G・フランクやアミンの「重商帝国主義」概念は、ギャラハ・ロビンソンの「自由貿易帝国主義」と吻合して資本主義を世界システムととらえようとする動向に大きな一助を加えたといつてよい。有名なイマニエル・ウォラステインの『世界資本主義システム』(川北稔訳、岩波書店)も、細部の

論証はともかくとして、その斬新な発想をマルクス革新の営みに生かしてゆくべきであらう。

これらの新しい動向は、「ロシア共同体論」によつて完成した唯物史観」などをはるかに越える、言葉の真の意味においてグローバリズされた「唯物史観」——私はこの垢じみたタームより「(マルクスの) 社会Ⅱ歴史認識」の語を選ぶが——の環を閉じようとしている。没後ようやく百年を経て、マルクスの思想と理論は、自然Ⅱ人間関係の最深部へその針をおろし、地球に住む全人類の歴史生活の包括化へと動きだしたと言え、それはあまりに蝸牛の歩みであったとの感禁じえない。しかし結局はそれが人間の営みというものであらう。「労働者階級は保守化した」、「国家は死滅しなかった」、「社会主義国間に戦争がおこった」等々、始祖が予測しえなかった無数の歴史事象を冷静に新しい論理へと紡ぎあげるには、キリスト教が魔女狩りを、「自由主義」が奴隷貿易を自己克服するほどの時間をやはり要したのである。

(12) 山崎カオル、『現代思想』、一九八三年一月号。

(13) 拙稿「生産様式接合の理論」、「経済評論」、一九八一年七月号、若森章孝「資本循環論と生産様式接合の理論」、「経済論集(関西大学)」第三卷一号、一九八二年六月号、室井義雄「『接合理論』に関する覚書——理論装置の確定のため」に、『専修経済学論集』第一八卷二号、一九八四年三月、参照。